京都工芸繊維大学学術報告書 第十一巻（平成三十年九月）

【学術論文】（査読あり）

トニオ・クレーガーの再会したハンスとインゲの像

――トーマス・マンの翻訳の一問題――

作家と作品 その楽しみのすべて Ⅲ

京都工芸繊維大学　基盤科学系
南　剛

（二〇一八年一月二十二日原稿受理　二〇一八年七月二十五日採用決定）

一

トーマス・マンの初期の短篇群の、成立史上でもひとまとまりのものの集大成の位置にある、「トニオ・クレーガー」は、特徴的なありかたにおいておよそ若いころへの郷愁に満たされている。

のちの全集版では全体が九章に章分けをされたうちのはじめの二章、主人公の十四歳のころのハンスとの交友、十六歳のころのインゲへの恋の叙述は、ほとんど一語一語が、計算し尽くされたというより反芻し尽くされたものであり、およそ恋する者の恋は恋することそのものが要求するほどには満たされないそしてそこにこそ恋の幸福が若年にしてすでにあることを、そしてその要求するほどには満たされない仕儀の一部始終を――まわりの副登場人物たちの無神経な行状が恋（少年トニオと同性のハンスへの求愛的交友は友情すべてを同性愛と言わない狭い意味で同性愛的ではまったくないがこの恋には含まれる）の邪魔をおのずとなすさまを――、これでもかというほど思い入れたっぷりに、ゆえに笑ってしまわざるをえないぐあいに、執筆と加筆彫琢に多大な時間をかけた達筆で濃密にしるす。文章の完成度は（計算のつじつまにむしろむらやことばの表面での矛盾は本論で述べるようにあるのだが）冒頭からのこの態度においておのずと高い。

しかも、その筆は、その仕儀がそのように生ずることそのものにおいて、すなわち少なくとも作品の描写する対象たる事態のできごとそのものにおいては、作者のその思い入れを

体現する作者の分身たる立場の主人公を、十分に突き放し、客観化している。しかも、そのこと自体が、また、この小説が主観にとって過去を対象としたものへの思い入れのうつわであるという性質を、印象上、効果上、強めている。客観的に突き放して放置していることが、これらの恋における恋の対象は類型的な優等生にすぎず、むしろその相手のとくだんすぐれた特徴でなく凡庸さに近い個性でしかないことを見せつける。

だが、類型的な優等生への、凡俗な者が持つそれ自体がすぐれてもないような特質的表情の個性のはしばしが喚起する《個性へのこの恋》は、自身はそうはなれない者の恋なのである。主人公も、文学愛好者たちとしての繙読の途中でこの作を投げ出すこととなるどころか引き込まれていくようなたいていの読者も、およそ、自身は、まるで全体はほとんど無個性さであるかのようなみごとな美しさをまわりのみなから万人からのごとくほめられる優等生とは反対の、おのずとして烙印のようによけいなことに気がつき言語化してしまうような、存在であらざるをえない。そのとき、その恋の対象となる優等生のそのちょっとしたつまらない美しさでしかないようなしぐさの癖等々の個性は、それ自体として、やはり、非人格的なものなのではなく、個人史的なかかわりを有する特定のその個人そのものにたいしての、むせかえるような、個体的な指向の対象凝縮結晶そのものなのである。

これらみっつ、思い入れと突き放しと特定個体的なかかわりの指向のむせかえりとが、あらかじめ作中の郷愁の強烈な場をなし、作を、思い入れたっぷりでかつ描写されるできごとの厚みにおいてはむしろ抽象的ながらも、読者を引きつける手慣れた高度な仕上がりでおおいつくす。

作は、春のうきうきした気分そのものを逆に作りあげるような、自身がうきうきしてしまう気分の中では芸術的たくらみを仕上げにくいことへの繰り言等々を、主人公が女友だちの画家に語る中間部の第四章を、まるでこの小説にとっての最も凝縮的に作り出した、作品空間や作品意想理路を代表する本体部分、作の基本的な感覚における地の部分、となしながら、しかし、はじめから完成した郷愁の若年描写の第一・二章と、そして、その後に出た旅でのさらになおむせかえるような個人的な対象への思いを回帰させられる第八章の主人公とハンスとインゲの像との再会とを、その中間部前後に、描写としてやはりさらにこの作の主要内容を対称的に提示し再提示する本体部分であるものとして、置く。

第三章で――その若い恋も意に反して個別性を失って薄れてしまったかのような中で官能に溺れた青年の暮らしも

送ったあとで――効果的言語化でことがらをかたづける冷徹で洗練された文士となりひとつの地歩を得た作家として、その第四章で長広舌をふるった主人公は、旅の途中第六章で（第五章第七章は六章八章の導入部）故郷のハンス宅やみずからの故宅が自身たちともしくはことさら自分自身とはなにも関係のないものにかわっているのを見せつけられたのちの第八章でのハンスとインゲの像との再会で、凡庸な特徴へのその恋が個別的なものそのものだったこと、への郷愁によって、悔恨にむせび泣く。手紙の第九章で、芸術家と俗人というかりそめの対立項を補助線のように持ち出しながらもそれを補助線の表層どおりだとなす最小布置をすりぬけてじつは組みかえ、それまでの文学上の仕事が思えばじつはほとんどなにものでもないところ、冷徹や洗練など超えた人間的社会的なる本格的作家としての精進の最大布置（のうえでの、さきの対立項補助線でとはまったく別種の芸術家）へと、この、故郷を離れて十三年、三十がらみの主人公トニオは一瞬ながら、人格の将来展開像の見とおしをさだめる。

その、ハンスとインゲの像との再会の場面において、この小説の日本語への、流布するもろもろの有名な翻訳に、じつは、ちょっとした、問題がある。しかも、そのちょっとした問題は、ほんとうは相当ていど、作品の理解の根幹にも、関係しないではいないような問題である。

ここでは、翻訳としては、平野卿子訳二〇一一年一月十日初刷河出文庫、実吉捷郎訳一九五二年五月二十五日初版初刷二〇〇三年九月十七日改版初刷岩波文庫、高橋義孝訳一九六七年九月二十五日初版初刷二〇一二年一月二十五日改版初刷新潮文庫、の各訳を、取りあげる。

二

二―一

平野卿子は河出文庫『トーニオ・クレーガー他一篇』の二四六ページ、訳者あとがきで言っている。

〔……〕今回訳出するにあたって、偶然とはいえ、この本を実吉訳で読んだことを幸せだと思った。トーニオがデンマークで実際にハンスとインゲに再会すると思っていた人が多いことに、あらためて気づいたからだ。かつてのふたりと再会したという誤解が生まれたのは、ひとつには翻訳に原因があるだろう。他の訳には再会したという前提で訳してあるものがいくつかあるからだ。

だが、何人かのドイツ人に尋ねてみたところ、再会したと思っていたという返事がいくつか返ってきた。そうなると訳の問題を超えている。ここでマンが「しかけている」のはたしかだが、それを考慮しても、やはり首をかしげずにはいられない。

トニオ(論者はドイツ語のじっさいアクセント長音であるトーに対して、カタカナ表記としては、日本語読者の日本人が正しくトに強いアクセントを置いて正しく音始直後に音高を下げて読める表記として、長音棒のないトニオとのこの表記を選ぶ)はこの故郷リューベックを経てのデンマークへの旅のあいだ、ハンスとインゲもそうであるような北欧系の青い眼と金髪の顔つきに出会い、あるまなざし、言葉の響き、笑い声といった兆候に胸を衝かれるような感覚を起こしたりしながら、また、故郷での一夜にみたようななにやらもつれ合ったやるせない夢をみたりしていた。ところが、旅の目的地としていた、ハムレットの舞台エルシノアのさらに北郊外の北海カテガット海域とズント海峡とに面した海水浴地オールスゴーの海浜ホテルに滞在中、無意識に待ちうけられていたかのような決定的なそのことの生じる日がやってくる。問題となるところ、つまり、トニオの再会したハンスとインゲがハンスとインゲそのひとではないことが、じっさいは文章上明らかにされており、そうではなくてどういう人物たちであるのかがわかるような、決定的な箇所(またはそうでありそうな箇所)は、その前後のながれの中で、三箇所である。原文と、特段の工夫したうえであるはずの平野訳、平野が絶賛する実吉訳、再会したハンスとインゲがハンスとインゲ当人たちであると訳している高橋訳の、それらの箇所を、原著十三巻本全集第八巻(一九七四年)と各和訳文庫版から挙げる(文庫振仮名は省略)。なお、実吉訳岩波文庫改版であらたについた濱川祥枝解説一三八ページによれば、濱川の旧制府立高校恩師で大御所先生である実吉の訳を、じつに、当時その同じ旧制府立高校「新進(同一三四ページ)」教師だった「高橋義孝氏も」信奉して「実吉訳に傾倒し」、「表紙が擦り切れるまでこの岩波文庫版を帯同しておられた」という眼前での事実があったとのことなのでもある(岩波文庫の、実吉訳のその版とは、一九三〇年刊『トオマス・マン短篇集I』という名称のものへ収められた旧姓日野捷郎訳名義のものを指していることとなる)。

Da geschah dies auf einmal: *Hans Hansen und Ingeborg Holm gingen durch den Saal.* —

Tonio Kröger lehnte, in einer wohligen Ermüdung nach dem Bade und seinem hurtigen Gang, im Stuhl und aß geräucherten Lachs auf Röstbrot: — er saß der Veranda und dem Meere zugewandt. Und plötzlich öffnete sich die Tür, und Hand in Hand kamen die beiden herein, — schlendernd und ohne Eile. Ingeborg, die blonde Inge, war hell gekleidet, wie sie in der Tanzstunde bei Herrn Knaak zu sein pflegte. Das leichte, geblümte Kleid reichte ihr nur bis zu den Knöcheln, und um die Schultern trug sie einen breiten, weißen Tüllbesatz mit spitzem Ausschnitt, der ihren weichen, geschmeidigen Hals frei ließ. Der Hut hing ihr an seinen zusammengeknüpften Bändern über dem einen Arm. Sie war vielleicht ein klein wenig erwachsener als sonst und trug ihren wunderbaren Zopf nun um den Kopf gelegt; aber Hans Hansen war ganz wie immer. Er hatte seine Seemannsüberjacke mit den goldenen Knöpfen an, über welcher auf Schultern und Rücken der breite, blaue Kragen lag; die Matrosenmütze mit den kurzen Bändern hielt er in der hinabhängenden Hand und schlenkerte sie sorglos hin und her. Ingeborg hielt ihre schmal geschnittenen Augen abgewandt, vielleicht ein wenig geniert durch die speisenden Leute, die auf sie schauten. Allein Hans Hansen wandte nun gerade und aller Welt zum Trotz den Kopf nach der Frühstückstafel und musterte mit seinen stahlblauen Augen einen nach dem anderen herausfordernd und gewissermaßen verächtlich; er ließ sogar Ingeborgs Hand fahren und schwenkte seine Mütze noch heftiger hin und her, um zu zeigen, was für ein Mann er sei. (S. 327 - 8)

と、そのとき、ふいにその出来事は起きた——ハンス・ハンセンとインゲボルク・ホルムが食堂を通っていったのである——

ひと泳ぎしたうえ早足で散歩をしたので、トーニオは快い疲労感を覚えながら、椅子にもたれ、ぐったりと海のほうを向いてスモークドサーモンを載せたトーストを食べていた。そのとき、急にドアが開いて、ふたりが手をつないで入ってきたのだ。とくに急ぐでもなく、のんびりと。インゲボルク、金髪のインゲは、クナーク先生のダンスのレッスンのときと同じような明るい色の

服を着ている。花模様の薄地のドレスはくるぶしのところまでしかなく、肩のまわりには幅広の白いチュールの縁飾りがついている。大きくくられた襟元からは、柔らかいしなやかな首がのぞいていた。帽子の紐は結んで腕にかけていた。昔よりほんのすこし背が高くなったようだった（1―A……論者言及箇所記号、以下同様）。あのたっぷりしたおさげはいま、頭のまわりに巻きつけられている。一方、ハンス・ハンゼンはあの頃のままだ。金ボタンのついたピーコートを着て、肩と背中には大きな青い襟。あいているほうの手で短いリボンのついた水兵帽を持ち、無造作にぶらぶら振っていた。インゲボルクはあの切れ長の目をそむけている。食事中の客に見られてちょっときまりが悪いのだろう。だがハンスのほうは、なんだよ、とでも言うようにまっこうから朝食のテーブルを見つめ、例の澄んだ青い目で、挑むように、いくぶん蔑むように端から順にねめ回した。そればかりかインゲボルクの手も放してしまい、帽子をいっそう激しく振りながら、自分がいっぱしの男だということを精一杯示そうとした。（平野訳一一二―三ページ）

と、その時、突然こういうことが起こった。――ハンス・ハンゼンとインゲボルグ・ホルムとが、食堂を通って歩いて行ったのである。――〔強調傍点ナシはママ〕

トニオ・クレエゲルは、水泳と足早な散歩のあとの快い疲れを覚えながら、椅子に背をもたせて、燻製の鮭を載せた焼パンを食べていた。――ベランダと海のほうへ向いて坐っていたのである。すると急に扉が開いて、その二人が手をたずさえて入ってきた――ゆるやかな迫らぬ足どりで。インゲボルグは、金髪のインゲは、クアアク先生の踊りの時間にいつもしていたような、白っぽい身なりだった。花模様のある軽い服は、くるぶしのところまでしかない。そして肩には、幅の広い白い絹飾がついている。それが深く刳ってあるので、軟らかい、しなやかな頸筋があらわれている。帽子は結んだままの紐で、片方の腕にかかっている。彼女は昔よりもほんの少し大きくなったかと思われる（1―B）。あのみごとな垂髪も、今では頭にまきつけてある。ところがハンス・ハンゼンのほうは、昔とちっとも変わっていない。金ボタンのついた例の水兵服で、その肩と背中とに、幅の広い青い襟がかかっている。短いリボンのついた水兵帽を、だらりと下げた手に持ったなり、のんきそうにぶらぶら振っているのである。インゲボルグは、食事をし

ている人たちに見られて、少しきまりが悪いのであろう、例の細く切れた眼をそむけている。しかるにハンス・ハンゼンは、かえってわざわざ、皆に対抗して、首を朝食の卓の方へ向けながら、例の鋼青色の眼で順々に一人一人を、挑むように、幾分さげすむように、じろじろ眺めた。それどころか、インゲボルグの手まで放してしまって、帽子をさらに烈しく前後に振り動かした。どんな男であるかを示すつもりなのである。（実吉訳一〇六―七ページ）

そのとき、突然こういうことが起った、すなわちハンス・ハンゼンとインゲボルク・ホルムとがこの広間を通ったのである。――〔強調傍点ナシはママ〕

トニオ・クレーゲルは、朝の水浴と足早な散歩とで気持よく疲れて椅子に倚り、トースト・パンに燻製の鮭をそえて食べていた。すると突然戸が開いて、手をにぎりあった　二人が入ってきたのである。――悠々と急がずに。インゲボルク、金髪のインゲは、クナーク先生の講習会のときよくそうだったように薄色の衣装だった。軽やかな花模様のあるドレスの裾はせいぜい踝のところに届くくらいで、肩のところには幅の広い白い網目のレースがついていて、背中が深く切り込んであるので、柔らかなしなやかな襟足がのぞいていた。帽子は、紐を結びあわせて片方の腕にかけていた。見たところ昔とそうちがわぬ背丈で（1―C）、あの素敵なお下げ髪は今では頭にまきつけていた。しかしハンス・ハンゼンは昔とちっとも変わっていなかった。金ボタンのついた水夫風の半外套をきて、幅広の青いうしろ襟を外套の外に垂らし、短いリボンのついた水兵帽を明いた〔漢字ママ〕ほうの手にさげて屈託なさそうにぶらぶら振っている。インゲボルクはその切れの長い目をそらせた。食堂で朝食をとっていた人たちの視線を浴びてきっと少々恥ずかしくなったからであろう。しかしハンス・ハンゼンは決然と食卓の方に真正面から向い立って、その鋼色の青い目で食卓の一人々々を順々に挑むように、やや軽蔑的にじろじろ見た。握っていたインゲボルクの手まで放してしまった。そしていっそう激しく帽子を振って、自分がどういう男であるかを知らせようとした。（高橋訳一〇二―三ページ）

Tonio Kröger sah sie an, die beiden, um die er vorzeiten Liebe gelitten hatte, — Hans und Ingeborg.

Sie waren es nicht so sehr vermöge einzelner Merkmale und der Ähnlichkeit der Kleidung, als kraft der Gleichheit der Rasse und des Typs, dieser lichten, stahlblauäugigen und blondhaarigen Art, die eine Vorstellung von Reinheit, Ungetrübtheit, Heiterkeit und einer zugleich stolzen und schlichten, unberührbaren Sprödigkeit hervorrief... (S. 331)

その昔自分に愛の苦しみをなめさせたふたりを、ハンスとインゲボルクをトーニオは見つめた。このふたりがインゲボルクとハンスだというのは（2―A）、ひとつひとつの特徴や服装が似ているからというより、同種で同タイプの人間だからだった。純粋さ、濁りのなさ、陽気さ。そして傲慢で無邪気で、冷たく近寄りがたい――そう思わせる明るさと、澄んだ青い目と金髪のせいだった……。（平野訳一一二ページ）

トニオ・クレエゲルは二人を、その昔自分を恋に悩ませた二人を――ハンスとインゲボルグとを眺めた。その二人がハンスとインゲボルグだというのは（2―B）、一々の特徴なり服装の類似なりのためよりも、むしろ種族と典型との等しさ――あの晴れやかな鋼色の眼、明色の髪を持つ種類としての等しさによるのだった。純潔と清澄と快活と、それから傲慢で同時に素朴な、犯しがたい冷淡さとのまざったものを思わせる、あの種類として等しいからだった。（実吉訳一一三ページ）

トニオ・クレーゲルは二人を、その昔自分がやるせない恋の悩みを味わわされた二人を――ハンスとインゲボルクとをじっと眺めた。この二人がともに彼を悩ませたのは（2―C）、二人の一つひとつの特徴や衣服の共通性のためというよりも、種族と類型の同一性、清純と、貞潔と、誇りかであると同時に素朴な犯しがたい冷たさとの入りまじった印象を呼び起す明るい、目が鋼色に青い、金髪の種族の同一性のためなのであった。（高橋訳一〇八ページ）

Hier, ganz nahe bei ihm, saßen Hans und Ingeborg. Er hatte sich zu ihr gesetzt, die vielleicht seine Schwester war, und umgeben von anderen rotwangigen Menschenkindern aßen und tranken sie, schwatzten und vergnügten sich, riefen sich mit

klingenden Stimmen Neckereien zu und lachten hell in die Luft. (S. 333)

ここに、すぐそばに、ハンスとインゲボルクが座っている。ハンスはいまインゲの隣にいた。このふたりはたぶん兄妹（3―A）なのだろう。頬を上気させた人たちに囲まれて飲んだり食べたりしながら、おしゃべりを楽しみ、よく響く声でからかいあったり、明るい笑い声をたてたりしている。（平野訳一二一ページ）

ここに、彼のついわきに、ハンスとインゲボルグが坐っている。男は、おそらく自分の妹（3―B）であるらしい女のそばに腰をおろしていたのである。そしてほかの頬赤き人の子たちに囲まれながら、食べたり飲んだりしゃべったり面白がったり、よく響く声でからかい合ったり、宙に向かって大きな笑い声を立てたりしている。（実吉訳一一六―七ページ）

ハンスとインゲボルクとは、すぐそこに、彼にごく近いところに坐っていた。ハンスは自分の妹（3―C）らしい若い女の横に腰を下ろしていた。彼らはほかの頬の赤い人間どもにかこまれて食べたり飲んだり、おしゃべりをしたり興がったり、よく通る声で冗談を言い合ったり、誰はばからず高らかに笑ったりしていた。（高橋訳一一一ページ）

ふたつめの引用の近くで、このインゲは、同じダンスパーティーピクニックグループの幹事であるらしい田舎の顔役風の燕尾服を着込んだ郵便局長代理のような男にダンスを申し込まれて、いちおうまんざらでもなさそうな、屈託なく快活そうな、しかし息が切れて断っているらしい奥ゆかしさもあるような様子を、示している。そのようなそこここの点において、このインゲは、かつてのインゲがいまは少女時代から現在までの年月のぶんだけ、歳を重ねたかの様子（インゲ本人であろうと本人とは別人であろうと）になっている読みも誘起しうるような、大人の女である印象を、与えてもいる。

もしその点をそうであるとするならば、かれらがハンスとインゲ（インゲボルク）というかつての名前のみでしか小説の描写上で呼ばれないなかで、このハンスとインゲの二人がかつてのハンスとインゲと同一人物でない決め手となりうる点は、ふたつめの引用の、訳文中それぞれ「2―A」「2

―B」「2―C」で示した箇所ということになりそうである。翻訳でも、かれらがハンスとインゲと同一の人間ではないことを前提に訳している平野卿子訳・実吉捷郎訳ともに、明示的にこのふたりがハンスやインゲと同一人物ではないことがことばにおいて示されている箇所は、全文中で、そこ（「2―A」「2―B」）のみなのである。

二―二

ところが、そこのドイツ語原文をよく見ると、じつは、そう訳してある「2―A」「2―B」は、別の訳となっている「2―C」よりも、ドイツ語の根本的な構文上の理解において、無理があるのである。

なぜなら、そこに対応する原文の一文（次では括弧のあとに示す）は、「(… sie … , die beiden, um die er vorzeiten Liebe gelitten hatte, - Hans und Ingeborg.) Sie waren es nicht so sehr vermöge … , als kraft … 」なのである。問題は、（括弧でくくったあとの）「Sie waren es」、ここにその、「文頭の sie」（いまの引用文中では文頭で大文字になっている語）と「es」の指しうるものがなにか、である。

もし、その「es」が、「2―A」や「2―B」のように「ハンスとインゲ」であるとするならば、「2―A」や「2―B」でこの「文頭の sie」の訳となっている「このふたり」「その二人」は、ドイツ語としてはその直前の「Hans und Ingeborg」を指しているのではありえぬこととなる。主格補語の「es」のほうを直前の「Hans und Ingeborg」であるとしたわけであり、内容が一致することをわざわざ文にして述べている「A＝B（ここで＝は繋辞のドイツ語動詞 sein の定形 waren のこと）」という一文は、「A」と「B」は別の語でないと（もしくはここのように代名詞であるばあいには「別の語を指すもの」でないと）およそ有意な一文ではありえないからである。

また、「die beiden, um die er vorzeiten Liebe gelitten hatte,」という部分は、意味からして、「その昔自分を恋に悩ませた二人を」ということであるから、それこそ「かつてのハンスとインゲそのもの」の意味となる。

そうなると、それより前の、「Tonio Kröger sah sie an,」の「sie」を、「Sie waren es」の「文頭の sie」は、指していることになる。「トニオは彼ら（＝眼前のこの二人）を見つめた」。その「眼前のこの二人」。しかしながら、それだと「文頭の sie」の指すものの配語上の位置があまりにも遠くて、また複数1格の人称代名詞が指すものの候補の選び方とし

て名詞や関係句付きの「die beiden」でなく複数4格の人称代名詞であるということがそもそも不自然であり、また、「2―C」だけでなく「2―A」「2―B」も、「文頭の sie」の指す対象を準備しておくために「眼前のこの二人」を「その昔自分を恋に悩ませた二人」と別に訳しておきなどは、してもいないのであるから、「2―A」や「2―B」が「文頭の sie」の指す語としてそういう解釈をとっているというこのさいごの仮説はそれらの訳の現実においても成立もしない。

つまり、「2―A」や「2―B」のような訳は、このドイツ語の理解としては、このドイツ語を具体的にどう理解しているとしても、「文頭の sie」と「es」の指しうるものが定まらず、けっきょく、無理なのである。

二―三

他方で、ここを「2―C」のようにとるのは、「二人の一つひとつの特徴や衣服の共通性のためというよりも」という部分に難があるかのようでもある。すなわち、ここの眼前のハンスとインゲの像たる人物たちがハンスとインゲと同一人物でないことをことばが示唆しているからこそ（ことに）「衣服の共通性のためというよりも」とわざわざ言われる意味があるのではないか（つまり「衣服の共通性」ということばはこの眼前の二人と本物のハンス・インゲのことに限るのではないか）、ハンスとインゲそのひとについて成り立つものとしての言表であるばあいに「衣服の共通性のためというよりも」ということばが意味をもちにくいのではないか、という点である。

だが、すでに上記のように、ここの「Sie waren es」の「文頭の sie」の指すものは「ハンスとインゲ」、「es」の指すものは「その昔自分がやるせない恋の悩みを味わわされた二人」、しかありえない。「Sie waren es」は「ハンスとインゲが、その昔彼をやるせない恋の悩みで悩ませた二人であったのは」しか、ありえないのである。

そのなかで、じっさいのところ、もともとのあの、ハンスとインゲの二人は、いかにも優等生的なだれからも愛されそうな凡庸な典型であり、そういう者としてのたいした美点でもない個人的な癖が、まさに恋の対象となるきわめて個体的な個性そのものの癖をやはりなすような癖であって、それが恋する者へ刻みつけられるのである。だから、「2―C」の直後のことばに、「種族」だというのは、南方的放縦なもの（トニオ自身について名前も母方の血筋もそうであることが第一章で強調されていたこととともちろん対比が効かされ

てではあるものの)にたいして北方的実直の凡俗という意味で北方的な人種、と、そのさらに平凡な属性として明るい髪明るい眼、が、典型的なものとして選ばれつつ、たんなる現実の人種眷属徴表や外形身体特性のことなのではない。それが思わせる、凡俗さを中心として「種族」的であるような、《身体形態自体でなくちょっとした性質》のことなのであり、じっさいにはどう、そのなかでも凡庸な優等生のかげりのない実直業務世界の自存性に見えるかが、かれらの個性なのである。――そこにおいてはそもそも、《服にも刻印されているうち服の類似自体を超える》優等生然とした表情や、「二人の一つひとつの特徴」以上である個々の特徴としての《そう目立つ美点でもない特定のもの》が、あらかじめものをいうのである。――しかもさらに、じっさいには、(ことばとひとつ逆に)具体的にはそれらの特徴がそのような服(「類似」でなく性質の刻印)も含めトニオの気持ちに痛いほど刻みこまれたのではあったが、(かつことばどおりに)それ以上に、優等生典型であることそのもの(しかもそのことの個性としてであること)がそこでいちばん鍵となっていた、ということを、――命題の叙述表面上少々矛盾的な表現をとりつつも――言っている部分で、あるものである。

(もしくは、敢えてさらに言えば、「眼前に現われたこのたびのハンスとインゲが彷彿とさせているものを含め」「およそハンスとインゲという存在」が、ともに彼を悩ませたのは「個々の服や特徴の共通性のためというよりも……であって」との脈絡が、記憶を呼び起こした「眼前の二人をハンスとインゲそのひとに回収させて」いるのであってそういうふうにハンスとインゲそのひとについての意識の深部が前面に思い出させられている、とのレヴェルも、もはや議論がやや細かすぎるが、見られうる。つまり、「およそハンスとインゲという存在」についての「個々の服や特徴の共通性」以上のものという側面。しかもそれは人種外形そのものでなく、「優等生典型」にこそまつわる個々の《美点でもない特定の性質》。そういう「典型」の痛いほどの記憶のよみがえりが眼前のものを優勢的には「およそハンスとインゲという存在」に覆い尽くしている、その、理路。眼前の二人とハンスやインゲとの類似というより、眼前の二人をいわば含むおよそハンスとインゲという存在の、共通性。その、典型であることにあってむしろまさにある、とりたてての美点でない個性。ことがらのわきにあたりまえながらそれもあるはずの「眼前の二人との類似よりも」というレヴェルは、強弁でなくじじつなによりも少なくともマンの構文の行論のうえでは、とはマンの意図のより主部においては、「ハンスとイン

ゲそのひと同士の外形的類似よりも」というレヴェルに含みこまれ、眼前の二人とともに、「およそハンスとインゲという存在」の理路その凡庸な個性的表情の理路に回収されている。なお、平野訳中「同種」や「純粋さ、濁りのなさ、陽気さ。そして傲慢で無邪気で、冷たく近寄りがたい――そう思わせる明るさと、澄んだ青い目と金髪のせいだった」あたりは、人種や髪や眼の外形自体を超える、その北方人種全員がそうであるべくもない《ハンスとインゲ》たち特有の「同種」の雰囲気とこの理路要部を、一種事実上、とらえてもいる。）

ハンスとインゲが《種族的》であるということが、明るい髪明るい眼の北方種族であるというよりむしろ《凡庸な実直種族かつそのなかでのつまらないみごとな優等生の典型》だということを内容としていること、そして、その凡庸な実直な優等生の典型という以上にじつはハンスとインゲそのひとの《魅力がたいした美点でない癖からなる魅力であるそこに、いちばんの個人的な魅力がある》のだということ。――作品のこの根幹にかかわりつつの、この文法内容――つまり、「Sie waren es」は「2―C」の「この二人がともに彼を悩ませたのは」で、まさにあるのだ。

本論での、指摘のみちすじそのものにふたたび戻ると、――つまりここは、ここのみにかぎると（最終的にむろん眼前のこの二人はハンスとインゲそのひとではないのだが）、ただしい訳は、なんと全体においてハンスとインゲ本人であることを前提とした、高橋訳の「2―C」のようであることに、なるほかはないのである。――ともかく、平野訳・実吉訳がここのみを眼前のこの二人がハンスとインゲそのひとでない決定的箇所であるよう明示して訳しているのはちがっており、ここが、眼前の二人がハンスとインゲそのひとであることがわかる原文における決定的な箇所でなどは、なかったのである。

三

三―一

それならば、このトニオの再会したハンスとインゲの像がハンスとインゲそのひとでないこと（というのも、やはり全体としてハンスとインゲそのひとでは明らかになく、それは続けて読む読者には証拠だてられなくともよくわかることであるのではあるが、そうはいっても）は、原文においてほんとうは明示的にはどこに、示されているのか。なにしろ、そのような明示的な箇所があるとしてそれ以外には、文中で

あまりにもつねに、このふたりのトニオの再会した人物たちは、ハンスとインゲとのみ、その無冠詞での固有名詞呼称（そしてかれらの属性のことは過去のハンスとインゲとの同一性を示しながらの定冠詞付きによって）ばかりしか、言われていないのである。

すべては、このふたりが、ハンスとインゲそのひとでないばかりでなく、つまりトニオが故郷を去って十三年というのと同じだけ年齢を重ねていまは三十がらみとなった本物のハンスとインゲでないばかりでなくて、また、《当人たちのその後のいまの姿かと思わせたがいま三十がらみでハンスやインゲに似た類型の別人の像だ、というわけでも、まったくない》、というのが事実である点に、なによりも、ある。

すると、この目の前のふたりは、三十がらみより若くて、いくつくらいの年齢なのか。

――とりもなおさずそれが、ひとつめの引用に、はっきり書かれていたことだったのである。だがそこの訳をこれら平野訳実吉訳高橋訳のみっつの訳で見よう。「昔よりほんのすこし背が高くなったようだった」（1―A）、……昔は十六だったから、たしかに年がたてば、そうはなるのだが。「彼女は昔よりもほんの少し大きくなったかと思われる」（1―B）、……たしかにその分、背がのびれば、そうはなるのだが。「見たところ昔とそうちがわぬ背丈で」（1―C）、……この高橋訳は、当人であるというように全体を解した訳においてだったわけであって、当人ならば当然にこの二人は年齢を重ねているという道理となり、「vielleicht ein klein wenig … als sonst」の「vielleicht ein klein wenig」を、「そうちがわぬ」と訳しているというわけである、そして、やはり、「背丈」のことであると、いうのだ。――ところが、この原文（いま一語だけこの観点の強調のため略したのだったが）は、「vielleicht ein klein wenig erwachsener als sonst」となっているのである。「erwachsener」は背丈などではなく、ここの意味は文字どおり、「より歳上である」、であるのだ。だから、ここは、平野訳を直せば、「昔よりほんのすこし歳上であるようだった」、なのである。ハンスもインゲもトニオの級友また級友格（インゲはトニオと同い年のクラスと明記はされてないが前から知っていた少女であって、その後もトニオが故郷にいたあいだにすでに、せめて恋する側の者の誠実さでいようとの自己観察自己要求を裏切って以前ほどは恋に真剣でなくなった自分を発見したというのであり、ほぼ同年齢である）であり、トニオの十四歳、十六歳のときの思いの相手なのだから、恋の当時のインゲは十六歳くらいだった。それが、この場では、ちょっとだけ歳上で、万人からの人好

きのする優等生の典型に見えて陽気で若々しいのにまわりにはにかんだふるまいからして、小娘であることをやめ大人にちょうどなりかかったくらい、さしずめ十八歳くらいの、若い女、であると、言っているのである。

そしてここでインゲといっしょに部屋に入ってきたハンスは、「aber Hans Hansen war ganz wie immer」、つまり、原文の意味は平野訳の「しかしハンス・ハンゼンは昔とちっとも変わっていなかった」と言っている以上に、「しかしハンス・ハンゼンは昔とまったく同じ年格好であ（りすべてあのころのままであ）った」ということであるのだ。だから、このハンスは、十四歳くらいの、子どもではないが子どもと大人のあいだのような年齢、男だから発育がその時期には早くはなく典型的な優等生であればむしろ大人びずあきらかに青年とは言えない稚なさの、少年、なのである。西欧の風体として、もし三十がらみとなったハンス本人であろうとも優等生風のきれいな青年がかつてと同じような幅広の青いうしろ襟のついたセーラー服を着ていることはちっとも違和感がないどころか、読者の期待にかなったかのように納得するほどであるのだが（だから三十がらみとの誤読も生じた）、ところがこのハンスが、かつての優等生らしさ以上に、向こう見ずな挑戦的な態度であるのは、三十がらみの「いっぱしの男」でなどあるからではなく、まさしく十四歳ぐらいであるからだったのである。このハンスを、ここでこのインゲは十八歳くらいと気がついても、十四歳くらいだとまでは直接には気がまわらないまま読んでしまうことがありうるだろうが、そのさいに残ったはずのちょっとした違和感は、このハンスの様子はまさに十四歳ぐらいの万人好きのする優等生の背のびした挑戦的な態度であるのがじじつはここの具体形象だったというところに存するのである。なんのことはない、ここでトニオが会ったのは、郷愁に憑かれた三十がらみの男とハンスとインゲの像との再会ということから、ハンスとインゲの本人たちがいまやじつは彼ら同士が結ばれていて手に手を取ってご登場（高橋訳）というのではなくとも（じっさいは別人なのだから）、かれら本人たちの強烈な印象喚起性を身にまとってお目見えする同類型のそっくりさんであるところから、ついついうっかり、やはりいまは大人となったハンスとインゲを思わせるひとを、読者はなかば予期してしまう（そしてこの直後に指摘するとおりじつは平野訳実吉訳はそうとっていることとなる）。ところが、元十四歳と十六歳のハンスとインゲがまさにそのかつての日のとおりの年齢で姿を現わしている、のであり、しかも、インゲのほうだけ十六歳でなく十八歳ほどであるというとこ

ろが、――まさに、この再会したハンスとインゲが本人たちではないということの、じつは、明示的な、最初の言語的提示であるのだ。

三―二

駄目押しのように、ほんらいはもういちど明示的な箇所であるのが、みっつめの引用箇所である。だがそこのきわめつけの平野訳実吉訳高橋訳。「ハンスはいまインゲの隣にいた。このふたりはたぶん兄『妹』なのだろう（『妹』の強調は論者、以下同様）」（3―A）。「ハンスとインゲボルグが坐っている。男は、おそらく自分の『妹』であるらしい女のそばに腰をおろしていたのである」（3―B）。「ハンスは自分の『妹』らしい若い女の横に腰を下ろしていた」（3―C）。同じダンスパーティーピクニックグループに属しながらこの海浜ホテルに登場したこのハンスとインゲは、兄弟姉妹であるとトニオが見たということが、ドイツ語でこんどこそ確実に、明記されているのである（ハンスとインゲ本人だとする高橋訳は、「じつはハンスに『妹』がいたのであって、そしてその『妹』もこの部屋にこんどは座っているのであって、これはその『妹』だ」、と強弁することになろうが、そんな「妹」が元々の十四歳の場面の描写でおくびにも出てないのであったから、これでは強弁のあり方が誤訳の印としかならない）。だが、いま「兄弟姉妹」と言ったのは、ドイツ語が歳の上下を表わさずに言うのがあたりまえの語法的言い方である「seine Schwester」というものであるからなのだが、それを、これら平野訳実吉訳高橋訳のみっつの訳は、あろうことかよりによって、「妹」と訳しているのだ。むろん、事実は、こんどの十八歳のインゲは、こんどの十四歳のハンスの、正しくは「姉」であるのであり、――それが（つまりその年齢関係とともにこの二人が「姉弟」であると、トニオにわかりゆえに読者にわかることが）明示された箇所で、ここはあったのである。（ところが、今回のインゲを「妹」としていることで、平野訳実吉訳が今回のハンスを十四歳ほどととっていないことは明らかであり、つまり平野訳実吉訳では今回のハンスとインゲは年をへた三十がらみであるととられていることとならざるをえない。）

これらの訳は、すべて肝腎のこの「姉」が「妹」と誤訳され、それにより、重要な推論的叙述の構造が、いわば台無しとなっている。だが、台無しとなっているのは、そのことばかりではない。それは、なによりも、マンが表面上の図式として用いている芸術家と俗人との対比が、ことがらそのもの

がやや矛盾的であるのだがじつはかりそめのものであるにすぎず、かつそれを道に迷った俗人たる芸術家としての中間者の地位などと単純化して読むといちばん元も子もないという事情に、細部内容上、ちょうど対応までしているのである。粗雑な図式そのものとしては矛盾的でありすぎることがらを、再整理自体がことばのうえのみでは形式上やや矛盾的であるところ、細部内容が、照らし出すのだ。（二〇一八年八月十二日附記、本論成稿後に、二〇一八年八月二〇日初版初刷発行奥付の浅井晶子訳光文社古典新訳文庫『トニオ・クレーガー』が出ているのを眼にしたが、「妹」誤訳その他、本論で注目する主要な点においてこの浅井晶子訳も平野卿子訳と同工であった。）

三―三

これが「姉」であり、こんどの十八歳のインゲと十四歳のハンスの姿がいまこそ個別的に浮かびあがりそれが壮麗に始まったこの日の中でであるからこそ、トニオは、ハンスとインゲの類型への懐旧などではなくて、ハンスとインゲの、その固有性への恋を、ここでの場面の具体的なしつらえの細部の中で、思い出す。それは、いたいほどの悔恨なのである。ここでトニオの悔恨そのものの内容が、ほかになにかあるというものなどではなく、けっきょく自身はそうはなれない者のなす凡庸な優等生存在への恋であることになにもかわりがあるわけがなく、再確認も不要である幼時からわかりきっていたことの再確認であるにすぎない。八章末尾平野訳一二六ページの訳語の選び方にも表われている平野文庫解説二三五ページに言うような、六章で「自分の過去と和解すべく故郷を訪れる」が果たせずハンスとインゲの像との再会で「そこではじめて過去との和解をなしとげる」などという内実や段階は論理としておよそありうべくもないのである。（もとより平野訳六八ページで名前が出てニーチェとの割注が付される――高橋訳でも六二ページに同義割注――「チェーザレ・ボルジア」を崇拝する「どこかの酔っ払い哲学」として、この初期のマンが一八九〇年代以降急激流行のニーチェ主義ばかりかニーチェそのものをもひとしなみに軽蔑していたにちがいないのだが、そのなかで、ニーチェとチェーザレに擬した兄ハインリヒを目す耽美主義の作家を、マンは合わせてこの場面で乗り越えられるべき単純な位置に置いているが、それもそれ自体であれば作品中間部第四章でのしかもそのさいごに七三ページ「片づけられ」る前のあらかじめの構図と同一であるにすぎない。）だが、その恋がただ

の類型でなく固有性を忘却していることへの悔恨が極致の郷愁と結びつけられることによって、トニオの思いは、芸術家と健全俗人市民という単純化しすぎた形態である方便的な補助線をおのずと超え、読者が注意深く捨象と抽象により同定しなければそれが見えないながら、よりすぐれた文学への精進という布置を、精進がもしそのとおりになされればおよそ真に本格的な社会性へまで及ぶほかはないはずの（第三章を承けての第四章での冷徹や洗練の関心などを超えた人間的なものであるので、そして精進であるので、人間と世界との関係そのものへ文学的に目が開かれるほかはありえず、必然的に最低限、およそ真に本格的な社会性へまで及ぶ）、最大布置として獲得する。――つまり。《より精進した文学、より高度な芸術家》は、《芸術家と健全俗人市民の対立という便宜的な補助線でも、それらの単純化した和解などでも、それらの固定化となるようなかつじつは鈍磨質で無内容なものでしかないそれらの中間者などでも、ない》ということと、《郷愁と思い入れの再度のこの上ない自己対象化》ということとの交点として、《社会へ、また人間と社会へ、本格的に取り組む（なぜならゲーテ時代以降もし「精神」が問題であっても「精神」もそういうものとしてでしかありえない）文学》という焦点を、おのずとことわりそのものの作用として浮かび上がらせる。

郷愁にこそ作品の重点がよっているから、中間部が作品の本体部分であるように見えるべくして見えたのであった。作品の、土台となる場は、あきらかに中間部第四章の、そこから抜け出さないとしごとができないものとして定着された、それ自体が郷愁のような、春の感覚そのものなのである――だから、第一章第二章の、ハンスやインゲとのできごとは、あらかじめそれを過去のこととして仕組んで彫託し抜いた、お手の物すぎる基礎的郷愁によって、ただみたされていたのだった。――しかしハンスとインゲの像との再会に、凡庸な優等生の類型性を超えて、ハンスとインゲそのひとの凡庸な美点の個人的個別性を、改めて、明確に、見る、最後の郷愁こそが、やはり作品の、より本体なのである。そしてそこには、第一章末尾と動詞の時制がちがうだけで同一文である「憧れと、憂鬱な羨望と、ほんのすこしの軽蔑と、この上なく清らかな幸福感とがある」（平野訳一三〇ページ）だけでなく、マンのありうべき構え・精進・文学のひろがりの可能性の、最大布置があるのである。

Hans Hansens und Ingeborg Holms Bild beim Wiedersehen mit Tonio Kröger
— Ein Problem der japanischen Übersetzung Thomas Manns —

Tsuyoshi MINAMI

Resümee

Die drei berühmten Übersetzungen von Thomas Manns ‚Tonio Kröger' (durch Hirano, Saneyoshi und Takahashi) enthalten Fehler in Bezug auf die Darstellung der Figuren der anderen Inge und des anderen Hans. Inge wird gezeigt, als ob sie nicht eine ältere Schwester (auf Japanisch „Ane'') sondern eine jüngere Schwester (auf Japanisch „Imouto'') des anderen Hans wäre und sie nicht ungefähr 18 (=„ein klein wenig erwachsener als sonst"), sondern um die 30 Jahre alt und damit in der Szene des Wiedersehens so alt wie Tonio selbst wäre. Und auch Hans wird in den Übersetzungen in dieser Szene als gleichaltrig mit Tonio gezeigt und nicht als 14-Jähriger (=„ganz wie immer"), der er eigentlich ist. (Dies ist besonders bei Hirano umso bemerkenswerter, als sie die Übersetzung Takahashis wegen anderer grundlegender Missverständnisse in derselben Szene gezielt kritisiert.)

Diese Unstimmigkeiten beruhen auch darauf, dass diese Übersetzungen Thomas Manns „Künstler-Bürger-Zwiespalt"-Schema fälschlicherweise nur wortwörtlich nehmen. Jedoch darf die Lage des „Künstlers" in ‚Tonio Kröger' nicht rein buchstabengetreu verstanden werden, sondern muss in der „Reue" und dem „Heimweh" des Helden in der Endszene verortet werden.